「飛騨古川らしさ」を追求し、進化し続ける町並み

町並み景観は、住む人それぞれの暮らしや思い、そこから生じる日々の営みから生まれ、また時代によって進化していきます。飛騨古川では途切れることなく、新しい町並み景観を追求する実践から「飛騨古川らしさ」が育まれてきました。そして今も、新たな試行錯誤が続いています。

大きな節目は、明治37(1904)年の古川大火です。市街地のほとんどを焼失した後、飛騨の匠の伝統的な技術により、調和のとれた町並みが築かれました。その後、周囲の町並みとの調和を重んじる気風「相場」が芽生えました。

戦後、多くの観光客が訪れるようになると、「風情のある美しい町を作ろう」との機運が高まり、美化活動が活発になりました。瀬戸川への鯉の放流をはじめ、今の基礎となる美しい景観づくりが住民の手で進められました。

昭和61年(1986)には(財)日本ナショナルトラストによる町並み調査が行われ、調和の取れた古川の町並みの良さが再認識されました。古川町観光協会では景観デザイン賞制度を設け、景観に配慮した「古川らしい」建物を表彰することで、住民の意識啓発も始めました。

観光客の増加による住民の生活への影響も懸念されはじめ、平成８年には飛騨古川ふるさと景観条例も策定。電柱や電線の地中化、町並みに合った街灯の整備など、暮らしと観光が両立するまちづくりが進んできました。

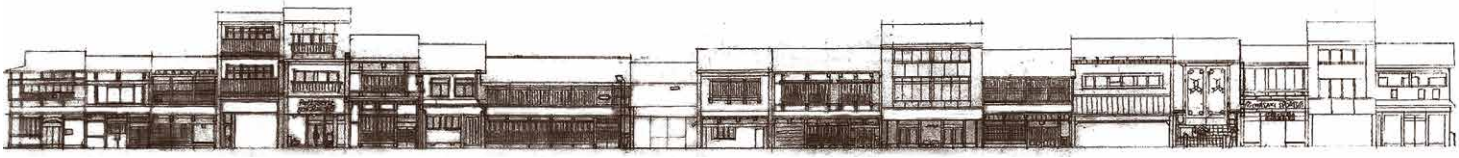
強制力のある規制を設けない一方で、住民が主体となり、時代に合った町並み景観づくりが進められたのが、飛騨古川の特徴の１つです。

変わりゆく美しい町並みの例
（古川町殿町）

昭和49(1974)年

昭和61(1986)年

令和５(2023)年



新潟大学工学部工学科都市計画研究室４年　鈴木伶梓さん作成

飛騨古川・町並み景観研究会の取り組み

高齢化や人口減少、空家増加、生活スタイルの変化により、匠の技術を継承する大工の後継者不足や、まちづくりの担い手不足も進み、市民の景観意識の希薄化などの課題も生じています。

常に変化していく町並み景観づくりには、次世代の育成が不可欠です。そこで、主に市街地在住の若手を中心とした飛騨古川・町並み景観研究会が令和４年５月、発足されました。

専門家を招いた講演会や、大学生との協働によるワークショップなどを通じ、古川の町並み景観の歴史や考え方を学び、将来の町並み景観づくりについて考える取り組みなどを行っています。

～参加者にうかがいました～

坂下（さかした） 誠知（ともちか） さん（古川町金森町）

◆研究会に参加した理由

瀬戸川の白壁土蔵街を歩いている時に、その美しさに気付き、「先人が作り上げたこの町並みを守っていきたい」と思ったのと、この風景が特別なものだと広く発信するために学ぼうと思いました。少しでもこの町に貢献したいですし、インフラ整備に関わる者として何か提案できれば。

◆古川の町並みのどんなところが好きですか？

観光化しておらず、ゆっくりとした時間の中で情緒あふれる風情を楽しめる点や、作られた町並み景観ではなく、人々が守ってきた町である点です。「美しく住みよい町であるように」という人々の意識が高いと思います。

◆今後どんな町並み景観をのぞみますか？

子どもたちが道路で遊んでいて、のどかで思わず笑みが出るような、そんな町が戻ってきてほしいです。そのためにも、若い人にこの町の素晴らしさが伝わる機会がもっと増えて、町の中心に再び人が集まってきてほしいです。人々がずっと生活を続けていけるような魅力ある町を目指して、時代にあった新たな取り組みを行い、この町で暮らす人々が「居心地がいい」と思える町であってほしいですね。

森茂（もりも） 聡子（さとこ） さん（古川町三之町）

◆研究会に参加した理由

一番の理由は、「古川が好き」だからです。ところが、「どんなところが好き？」と尋ねられると、表現しきれなくて困りました。だからこそ、その気持ちを今の等身大の自分でじっくりと味わってみようと思い、参加しました。

◆古川の町並みのどんなところが好きですか？

古いものも新しいものも自然も、調和しながらそこに在ること、そこに人の暮らしが息づいているところです。研究会で町歩きをした時、玄関先の花や店先のディスプレイ、椅子やベンチ、民家の壁の色など、あらゆる物事に心が躍りました。先人が工夫を凝らし、競い合って創ってきた町の良さを感じる感性が私の中にも「ある」ということに気付けて嬉しかったです。

◆今後どんな町並み景観をのぞみますか？

飛騨の自然と人々の暮らしが調和した景観です。そこで暮らす人たちの便利さや楽しさ、美しいと感じる心がぞれぞれ大切にされて、それが景観という形になった時に、みんなで喜び合える場として活用され続けてほしいです。それを目指し、私たち自身が景観の一部であるという認識が広がったら、もっと面白い町になりそうです。

町並み景観保全の取り組み

古川の歴史や文化の学び

國學院大学の西村幸夫教授、新潟大学の松井大輔准教授、学生の皆さんなどの協力を得て、古川の町並みの変遷や文化などについて実践を通して学び、古川の町並みの特徴や良さ、町の今後を考える取り組みを進めています。

懐かしの町並み写真展

昔懐かしい古川の町並みの写真を撮影された場所や多くの方に見ていただける場所に展示しています。現在は飛騨の匠文化館(三寺めぐり朝市側の外壁)に展示しています。ご覧いただき、写真にコメントをお寄せください。

夜景と照明の見直し

世界的な照明デザイナーの面出薫さんを講師に迎え、円光寺と古川市街地を会場に都市照明と夜景に関するワークショップを開催。各ポイントを実際に巡って効果的な照明、不要な照明などを学んだ後、気づきを書き出して意見交換をしました。

今後も広くアイデアを出し合いながら、これからの古川の町並み景観について地域の皆さんに考えていただく機会を設けていく予定です。

さまざまな催しを広報などでお知らせしていきますので、興味のある方は、ぜひご参加ください。この機会に、自分の住む町の景観を見直し、あなたの理想の町を考え、行動してみませんか？

景観を大切に考え
地域で活躍する
実践者に
うかがいました

「第38回古川町景観デザイン賞奨励賞」受賞

IORI TONOMACHI（宿泊施設）

施主　株式会社HIDAIIYO代表取締役　松場慎吾（まつば しんご）さん

①景観について施工する上でこだわった点

町並みとの調和を最も重視し、施工前よりも良い景観になるようこだわりました。格子や左官壁、照明などは、建築士や工務店の方々と町を歩き、議論して決めました。設計デザイン、建築大工、水道設備、電気、建具、檜風呂、和紙なども、ほとんどすべてを飛騨古川の景観に理解のある地元の人々の力で行いました。

②古川の町並みにどのような思いがありますか？

高校卒業まで過ごした大切な風景といった思いがあります。通学路であり遊び場。銭湯の後に家族で行く美味しいご飯屋さん、子どものためのクレープ屋さん、点在する駄菓子屋、仲の良い同級生の家、ユニークなおじちゃんやおばちゃんなど、良い思い出も苦い思い出も含め、様々な記憶が刻まれた風景です。

③どんな町並み景観になることを期待しますか？

多様な価値観が広がり、古川らしい町並みを維持するのは難しくなってきました。皆が同じ価値観を共有して発展してきた時代は終わり、多様な価値観を持つ個の時代に移っています。家を建てることは自己表現の機会でもあるので、制限されるべきではないと思います。一方、外側だけでもいいので本物の飛騨らしさを感じさせる町並み、古川祭が似合う町並みであり続け、次の世代の記憶に残る風景になるといいですね。

問 まちづくり観光課　TEL 0577-73-7463